=市史編さん便り=　【38 号】 令和 3 年 9 月 27 日（月）発行.
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊土佐清水市教育委員会生涯学習課・市史編さん室

―市域及びその近隣に残る平家落人伝説―

先日、市外在住の方で安徳天皇の各地に残る伝説を調べている方から市内大川内（下ノ加江の奥にある集落）に伝わる伝説について問い合わせがあった。そのときに勉強不足のため十分にお答えできなかった。

そこで今回は、現行『土佐清水市史上巻』212～216 頁に記述されている平家落人伝説について、その要旨を簡潔にとりまとめとめたのでこれを紹介したい。

（1）平氏滅亡までの流れ

平氏は平治の乱（1159）によって急速にその栄華を手にした。結果、官職や荘園公領制の利害対立をめぐる軋轢が、後白河上皇や他の貴族との間で生じた。また、地方に勢力を置く諸国の武士たちの中にも平氏に対して不満を持つ者が多くいた。

治承元年(1177)に「鹿ヶ谷の変」（後白河上皇とその近臣が鹿ヶ谷の山荘で平家討伐の謀議を密談した事件）が起こった。これに対し、平氏は、後白河上皇院政の停止と院を支持する公卿を大量解官の処分をおこなった。

また、翌年、平氏の血筋であった幼少の安徳天皇を即位させた。皇位継承が断たれた後白河上皇の皇子である以仁王（もちひとおう）は、源頼政とともに平氏討伐の号令を発した。

これに応じて、源氏の嫡流である源頼朝は、配流先の伊豆で関東武士団の支持を得て、鎌倉を拠点に鎌倉幕府の足場を固めた。その後、文治元年(1185)、長門国壇ノ浦で平氏は壊滅し、政権は鎌倉幕府に徐々に移行された(1)。

（2）市域大川内に残る安徳天皇の伝説

この壇ノ浦の戦いで、幼少の安徳天皇も側近と入水したことが定説となっている。しかし、伝説によるとその安徳天皇が、側近の近習たちにより密かに落ち延びて生きていた。このような伝説が、全国各地に残っている。

◎市内大川内に伝えられる以下の伝説もその中の一つである。

8 人の勇敢な近習に守られて、海上を 7 日間も彷徨し、壇ノ浦から非難して、土佐国幡多荘の下ノ加江浜に漂着した。下ノ加江村小方の有力百姓・利右エ門が天皇一行を保護し、一時自宅にかくまった。しかし、そこは人の往来が多く、目立つため、追っ手を欺くため、伊豆田峠付近の「天子ヶ森」の山中にしばらく居を置くこととした。その後、ここから下ノ加江川上流の大川内に転居した。そのときに、源氏の追っ手の目を撹乱するために、「天子ヶ森」に空墓をもうけ、そこに埋葬したこととした。8 人近臣のうち 6 名は、目立たないようにここで離散した。残った 2 名の近臣・藤原兼重・

大塚弾正が天皇を養育するために残り、大川内の御座所に仕え、幼い天皇を養育していくことになった。大塚弾正は「武術」を、藤原兼重は「学問」を教えたと伝えられる(2)。

兼重は、京都から妻子を呼び寄せ、娘を天皇の妃とし、安徳天皇は一皇子、二宮をもうけた。宮の一人は、三原村狼内に嫁ぎ、在郷の野村氏の祖になったと伝えられる。皇子は久仁麿を名のり、その子孫は代々農業をおこない、現在田村姓を名のり三原村に在住しているという(3)。

(3) 天子ヶ森に空墓、大川内地区の重串(しげくし)に陵墓が所在していたとのことであるが・・・

安徳天皇の陵墓といわれる五輪塔は、重串（しげくし）の旧墓地跡に所在していると(4)、『土佐清水市史上巻』(214 頁）には記されている。また、天子ヶ森の空墓についてもその具体的な所在場所は記載されていないが、「山石を長方形に積み重ねたもの」「現在は祠として屋根囲いしている」と『土佐清水市史上巻』(216 頁）にある(5)。

いずれにせよ周辺に土地勘がない人が、これらの陵墓とおぼしき石造物を探すことは困難であろう。

註

(1)佐々木潤之助・佐藤　信・中嶋三千男・藤田　覚・外園　豊基・渡辺　隆喜『概論　日本歴史』吉川弘文館、2012 年、55－56 頁。
(2)中山　進「三　中世」(『土佐清水市史上巻』土佐清水市、1980 年、213－216 頁）
(3)(2)に同じ。
(4)(2)に同じ。
(5)(2)に同じ。

【編集後記】

9 月 25 日 16 時過ぎ、国立公園ジオパーク推進課・森口夏季専門員から、喜びの連絡が携帯に。「土佐清水ジオパークが、日本ジオパークに認定された」とのこと。この場をお借りし、関係者の皆様にお喜びを申し上げます。高知新聞朝刊 27 面（山﨑彩加清水支局長取材記事）では、泥谷光信市長は「認定は一つの通過点」、土佐清水ジオの会・井上章会長は「まだまだ課題はたくさんある。ゴールではなくスタートと受け止めたい」と述べられている。

市長とジオの会会長が述べられているとおりである。今度は取り組みを継続していくことになる。認定という直近の目標がなくなり、地道な継続的取り組みの連続が必要となり、これが今まで以上に労を要することになるだろう。

立場は変わるが、市史編さん事業も同じだと思う。ここで気持ちを引き締め、謙虚な気持ちを持ち、素晴らしい、意義ある市民のための基軸書＝新市史の刊行を目標にこれからもベストを尽くしていきたい。市史編集委員の皆さんと心と力を合わせながら。前に、また前にと！（田村）